

2024年12月29日（日）「あなたが私を選んだのではない」

ヨハネ 15:16

あなたがたが私を選んだのではない。私があるがたを選んだ。あなたがたが行って実を結び、その実が残るようにと、また、私の名によって願うなら、父が何でも与えてくださるようにと、私があるがたを任命したのである。

2024年もいよいよ終わろうとしています。この一年も計五十二回の主日礼拝を守ってまいりました。私自身が体調不良により現地で礼拝に出席できなかった時期もありましたが、どのような状況下にあっても教会の歩みを主が支え続けてくださったことを覚え、感謝いたします。そして、皆様が信仰に立ち続けておられること、礼拝生活を継続しておられることは、実は当たり前ではないということを改めて心に留めております。年の締めくくりにあたって、私たちがなぜ礼拝者とされているかを、もう一度考えてみましょう。私たちが信仰生活を継続しているのは、自分の意志によるのか、それとも何かに導かれているのか。今日は、「神の主権と人間の自由意志」というテーマをご一緒に考えてみたいと思います。

人は確かに自分の意志によって信仰に入りますが、その意志は神の選びに基づいています。つまり、自分で信じたようでありながら、実は神の主権の下で信仰に導かれたということです。

神は前もって知っておられた者たちを、御子のかたちに似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くのきょうだいの中で長子となられるためです。神はあらかじめ定めた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とした者に栄光をお与えになったのです。（ローマ 8:29-30）

私たちは、神が永遠のご計画の下、神の子となるように導かれた。私たちが信じる決断をする前に、神がそのようにさせようと働きかけてくださった。選ばれなければ信仰に至ることもなかったのです。すると、神は不公平ではないのか、伝道する意味とは何なのか、信じない人は責任が問われないのではないのか、そういう疑問が湧いてくるかもしれません。

この「神の主権と人間の自由意志」の問題は、紀元5世紀に二人の神学者によって論争されました。ペラギウス（354-420）とアウグスティヌス（354-430）です。ペラギウスは「神は人に『自由意志』という賜物をお与えになり、人は神を選ぶことができる」と主張しました。それに対しアウグスティヌスは「人間の自由意志は罪によって腐敗しており、神が恵みによって選んでくださらなければ人は神を選ぶことはできない」と主張しました。聖書の多くの聖句はアウグスティヌスの見解を引き出していますが、この論理を突き詰めると、人間に自由意志の余地はないということまで行ってしまうかもしれません。神が救いを予定し人間の意志にまで介入されるということは、人は自分の意志で行動しているのではないと言いうるからです。

皆様は実際、どのようなきっかけで教会の門を叩かれたでしょうか。何か相談したいこと

があったという人、教会の活動に興味を持たれたという人、友人に誘われて行ってみたいという人、あるいはクリスチャンホームに生まれたという人もいらっしゃるでしょう。導かれ方は異なれども、同じ神様の許に来られたという事実には変わりはありません。教会に行ってみようという決心をしたのは自分であるにも拘らず、「導かれた」という言い方をされるのに違和感を覚えた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

今日特に心に留めるべきことは、人間が持つ視点と神が持つ視点は次元が異なるということです。人間にとって時間は有限であり、基本的には自分の目に映る事柄しか認識することができません。過去に起きてきたことを知るにしても、何らかの情報を得て知識として知ったにすぎない。それを実際に見たわけではないのです。未来の事柄は尚のこと、先に何が起こるかは予測できても確証することはできません。

長い渋滞に巻き込まれた経験があるでしょうか。車が詰まってくるとき、目の前の車が止まっていくのを見るばかりで、その何キロメートル先がどうなっているか、後続車はどこまであるのか、目で確かめることはできません。では、カーナビはどうでしょう。衛星で高い位置から交通事情を把握し、どこからどこまで渋滞しているか、迂回路はどこか、目的地まで何時間かかるかなど、あらゆる情報を利用者に知らせてくれます。鳥瞰的に物事を見ると、歴史の全体像を握っている神の視点に例えることができるでしょう。神には時間という概念が存在しないのです。人間が「予知」とか「予定」とか言う言葉は神の辞書にはない。人間が「点」で物事を見ているのに対し、神はすべての点を熟知し、点と点は線でつながっており、線と線は結び合って面となっていて、面と面は組み合わさって立体となっています。つまり、神が人の救いを永遠という次元で計画しておられることと、人間が自由意志をもって救いに入っていくこととは、何の矛盾もないのです。

聖書の中には、神が神の民を「選んだ」ということを表す箇所が多く存在します。

- ・ **あなたがたが私を選んだのではない。私があなたがたを選んだ。**あなたがたが行って実を結び、その実が残るようにと、また、私の名によって願うなら、父が何でも与えてくださるようと、私があなたがたを任命したのである。(ヨハネ 15:16)
- ・ 主がその期間を縮めてくださらなければ、誰一人救われぬ。しかし、主はご自分のものとして選ばれた人たちのために、その期間を縮めてくださったのである。(マルコ 13:20)
- ・ イエス・キリストの使徒ペトロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散し、滞在している選ばれた人たち、(Iペテロ 1:1)

選びの教理を理解する上で重要なポイントが二つあります。第一に、私たちが神を選んだのではなく神が私たちを選ばれたということです。「選び」という教理に含まれる「謎」は、救われて神の家族の一員となって初めて理解することができます。これは「神の家族の秘密」なのです。私たちがまだ神の家族に仲間入りしていない段階では、私たちはそこに入る

か否かは自分の選択によって決めることだと思っています。すべての人にその招待状は届いていて、その招待状にはこのように書かれています。

すべて重荷を負って苦勞している者は、私のもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう。(マタイ 11:28)

この招きに応えるかどうかは、その時点では自分の選択にかかっていると理解しています。それもまた事実であり、人は招きに応えても応えなくてもよいのです。ところが、ひとたび招きに応えてドアを開いてみると、そのドアの裏側には別のことばが書かれていることに気づきます。

父が私にお与えになる人は皆、私のもとに来る。私のもとに来る人を、私は決して追い出さない。(ヨハネ 6:37)

あれれ？おかしいな。自分は自由意志でドアを開けることを選んだはずなのに、誰かの意志で開かされたことになっている。人間の視点ではこれらのことは矛盾に映るかもしれませんが。しかし、神の視点ではこれらは完全に一致しているのです。両方の聖句は、視点は異なりますが、別の角度から同じ真理を語っているのです。

選びの教理を理解する上で重要な二つ目のポイントは、私たちが誰であるか、何をしたかにかかわらず、神が私たちを選んでくださったということです。旧約では、イスラエルの民が神の民として選ばれたということが繰り返し語られていますが、念入りに言われているのは、イスラエルの民が神の民にふさわしかったから選ばれたのではないということです。

- ・ **あなたがたがどの民よりも数が多かったから、主があなたがたに心引かれて選んだのではない。**むしろ、あなたがたは、どの民よりも少なかった。(申命 7:7)
- ・ **だからあなたは、自分が正しいから、あなたの神、主がこの良い地を所有させてくださるのではないことを知りなさい。**あなたは、実にかたくなな民なのだ。(申命 9:6)

イスラエルの民は頑なで神に逆らうことばかりしていたにも拘らず、神は一方的な恵みによって彼らを神の民としてくださった。これは、イスラエル民族でなかったとしても同じことです。すべての人は病んでおり、根本的に聖なる生き方ができないのです。しかし、神には如何なる人をも神の民として招き入れることがおできになります。パウロも異邦人の中から信仰に入った人々に対して同様のことを語っています。

しかし、神は憐れみ深く、私たちを愛された大いなる愛によって、過ちのうちに死んでいた私

たちを、キリストと共に生かし——あなたがたの救われたのは恵みによるのです——、

(エペソ 2:4-5)

神の御前に正しかったから救われたという人は一人もいません。ただ神の主権と恵みと選びによって、その人に与えられた「時」に救いの門をくぐるよう導かれたのです。

それでは、選ばれていない人が「救いの門を開かない」という判断をしても責任は問われないのではないかと、責任を問うのは理不尽なのではないかという疑問が残るかもしれませんが。しかし、聖書は人が自由意志によって門を開かないところには責任が伴うとも語ってい

ます（例：ヨハネ 13:2／イスカリオテのユダ）。これら相反するような二つの真理は、神の中では果たして調和しているのでしょうか。ここで聖書読者に求められるのが、先の「カーナビ的」な視点です。聖書読者にとって、二つの真理は点と点で相反することがあっても、神の立体的な視点では完全に調和している。聖書読者には、この神の視点という異なる次元で物事を見ることが求められているのであって、その視点を持つことにより現在世界で起きている多くの理解不能な事柄が一つの絵のピースとしてふさわしく嵌ることを知るようになるでしょう。「二律背反」という言葉がありますが、これは「一見相反する二つの原則が立ち並びながら互いに否定できないで存在していること」を意味します。神の視点を持つことにより、私たちの知性の枠は大きく広げられるのです。

私たちの救いが神の壮大な救いのご計画の一部として成就しているということ、そのご計画に変更はないということ覚えて、この年を締めくくりたいと思います。また、現在世界で起きている諸々の出来事も、点で見るのではなく、常に神の立体的な視座に立って見る努力を続けていきたいと思います。悪の力が増し加わっても、それもまた永遠の神の国を完成に至らせる過程であり、神の必然の一部であるということをお忘れのないようにしたい。新しい年を迎えるに当たって、私たちの視野を神の視点に置き換えて、歴史全体を、そして自分の人生全体を見つめ直したいと思います。

【祈り】

私たちを救いへと導いてくださった天の父なる神様。私たちは自分の意志で信仰に入ったようでありながら、実はあなたの救いのご計画の中で信仰告白に至ったということを感じます。そして、私たちが生涯に亘ってこの信仰に立ち続けられるのも、あなたの守りによるものであります。自分の不確かな決意によるのではなく、あなたの変わることのない恵みと選びによるという、大きな安心を胸にこの年を締めくくってまいります。私たちの視野が広げられ、世界の諸々の出来事をも神の視点で捉えていくことができますように。来る 2025 年も、あなたの御手の中で歩ませてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
永遠のご計画により、時宜に適って、人を救いへ導き給う、父なる神の愛、
信仰に至った者を、人生の終わりまで御手の中で養い給う、主イエス・キリストの恵み、
世の不可解な出来事も、神の立体的な視座で捉え直させ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。